

報 告

精神科における長期入院患者のストレングスに焦点をあてた 看護の特徴に関する文献研究

安藤 愛* 後藤 有紀** 前田 由紀子*

<要 旨>

本研究は、精神科における長期入院患者のストレングスに焦点をあてた看護の特徴を明らかにすることを目的として文献研究を行った。文献は、医学中央雑誌 Web 版を用いて「ストレングス」「精神」「看護」をキーワードに全年検索し、看護と患者の変化が詳細に記載している事例研究 12 件を対象とした。分析は、行った看護を抽出しラベル名をつけ類似する内容でカテゴリーを作成した。長期入院患者のストレングスに焦点をあてた看護の特徴は、患者との対話を重視しながら患者の思いや希望に着目し、現実に向き合えるよう関わっていた。また、患者の主体性を育みながら患者の言動を支持する看護が行われていた。長期入院患者の社会復帰や状態の改善には、患者との関係性の構築や対話を継続的に行い、患者の思いや自己決定を見守りながら主体性を育む関わりが重要である。また、看護師は患者が現実に向き合い、乗り越えていけるように支援することで患者のリカバリーの促進につながることを示唆された。

キーワード：長期入院患者、ストレングス、看護、文献研究

I. はじめに

近年、精神病床の平均在院日数は、274.7 日と過去 10 年間で 52.5 日短縮している¹⁾。約 9 割の新規入院患者が 1 年以内に退院しているが、依然として 1 年以上の長期入院患者は 20 万人を超えている現状にある。2004 年に厚生労働省が入院医療中心から地域生活中心へ改革を掲げてから「長期入院の解消と地域移行支援が切実に必要」²⁾ となり精神看護の領域でリカバリー概念やストレングスモデルの活用が広がっている。リカバリー概念は、1980 年代に米国で広がり、脱施設化の一助となっている³⁾。ストレングスモデルは、1990 年代にチャールズ・A・ラップらによって提唱された当事者のストレングス(強み)を生かした支援であり、入院・救急受診の回数の減少、危機に直面する頻度の減少、地域生活技能と適切な社会行動の改善などの効果がみられている⁴⁾。Rapp and Goscha⁵⁾ は、リカバリーのビジョンは、ストレングスを実践するための原動力であり、リカバリーへのビジョンがないとストレングスモデ

ルの実践は成長や目標達成ではなく現状維持に終始してしまうと述べていることからリカバリーを意識したストレングスモデルの活用が重要である。

また、萱間⁶⁾ は、入院生活から地域生活にスムーズに移行するための退院支援が求められている今、「問題解決モデルが有効な急性期を過ぎ、回復して社会での療養生活を考えるときには、ケアする側も、ストレングスモデルの視点に切り替えることが求められる」と述べていることから長期入院患者には、ストレングスモデルの活用が重要であることがわかる。長期入院患者は、精神症状だけでなく施設症とも向き合いながらリカバリーを目指していかなければならない。個性や意欲が失われ、病院の中でしか生活できない状況にある施設症の患者は、今後の人生への希望を育むことから看護を始めていかなければならず、社会復帰に向けての希望をもち始めてからの看護とは内容が異なってくると考えられる。そこで、ストレングスに着目した長期入院患者の事例研究を対象に、患者の状況(時期)を意識しながら行われている看護の特徴を明らかにしていく。

* 西南女学院大学保健福祉学部看護学科

** 元西南女学院大学保健福祉学部看護学科

II. 研究目的

精神科における長期入院患者のストレンクスに焦点をあてた事例研究を対象に看護の特徴を明らかにする。

III. 研究方法

1. 対象となる文献

精神科における長期入院患者のストレンクスに焦点をあてた看護を明らかにするため2021年4月に医学中央雑誌を用いて、「ストレンクス」and「精神」or「精神科」and「看護」で全年検索した結果、213件がヒットした。そのうち、会議録、解説、総説を除いた原著論文は、130件であり、事例研究は71件であった。また、精神科病棟における長期入院患者を対象とした事例研究は27件であった。27件の中から「患者のストレンクスに焦点をあてた看護」と「患者の変化」の過程が詳細に記載している事例研究12件を対象論文とした。

2. 分析方法

- 1) 対象文献から患者の状況、看護師が行っている看護、患者の変化が記載されている部分を一連の流れで抽出し、看護実践の内容からラベル名をつけた。
- 2) 長期入院患者にとって社会復帰は、長期間の入院により社会から隔絶されることで不安も大きく簡単なことではない。また、施設症によって退院したくないと思っている者もあり社会復帰への思いや意欲をもてることは退院への大きな一歩となるため、患者から社会復帰に向けた何らかの具体的な発言がある前と後で看護の時期を分類した。
- 3) 時期ごとに行っている看護の内容をよく読み、類似する意味内容でまとめサブカテゴリー、カテゴリーを作成した。
- 4) カテゴリー作成後、患者の変化を確認し、行っている看護に伴う患者への影響を確認した。

3. 用語の定義

- 1) 長期入院患者

1年以上精神科病院に入院している精神疾患患者とする。

4. 倫理的配慮

- 1) 本研究は、すでに発表された文献を用いて研究を行うため著者の意図を損なわないよう事実を忠実に抽出して分析を行った。
- 2) 分析は、複数の精神看護学教員で行い内容の妥当性を図った。

IV. 結果

1. 対象とした文献の概要について

対象とした12件の事例研究では、性別では男性が多く、疾患は統合失調症が多かった。患者が退院に至ったのは3件(No.7/10/12)であった。退院に至っていない文献もすべて患者の状態の改善につながっていた。(表1)

2. 2つの時期で分類した看護について

①社会復帰に向けた発言がない時期では、カテゴリー8個、サブカテゴリー23個、ラベル名80個。
②社会復帰に向けた発言後の時期では、カテゴリー5個、サブカテゴリー11個、ラベル名33個が抽出された。時期別に分類したカテゴリー、サブカテゴリーは、表2で示した。なお、【 】はカテゴリー、◀ ▶はサブカテゴリー、“ ”は患者の変化、「 」は看護実践の文献記載内容、()は文献Noとして示した。

1) 社会復帰に向けた発言がない時期

この時期では、【関係づくりのための意図的な関わり】【患者理解に向けた対話を重視した関わり】【患者のストレンクスに着目した関わり】【患者と共に行う目標に向けた取り組み】が行われ、患者のもつ力を高めるための看護として【セルフマネジメントを高める関わり】【困難に立ち向かう力を高める関わり】【意欲を高める関わり】【自己決定を意識した関わり】が行われていた。

【関係づくりのための意図的な関わり】では、「信頼関係を構築することを優先し、日々挨拶や何気ない声かけを増やした(No.1)」「関係性構築のため看護師も自己開示しつつ、患者の興味を話題にして楽

長期入院患者のストレングスに関する看護

表 1. ストレングスに関する事例研究の概要

No	研究者 (年)	タイトル	年齢・性別	疾患	入院期間	症状	データ収集・介入方法	結果の概要(患者の変化について)
1	山口 (2019)	統合失調症慢性期におけるその人らしさを支える援助～患者のストレングスを最大限活かすかかわり～	60歳代男性	統合失調症	18年	意思表示が少 ない	ストレングスマッピングシートを活用した面談、患者～看護師関係はベプロウの人間関係の継続的段階に基づいた評価など	信頼関係が生まれ、対話が深まり、定期的な面接の中で患者自身が望んでいることを表出するようになった。
2	笠原ら (2019)	重度かつ慢性患者と看護師の関係性の変化について～ストレングスマッピングシートに着目した継続的なかかわりを通して～	30歳代男性	統合失調症	長期入院 (期間不明)	妄想により会 話が成立しに くい、被害的	ストレングスマッピングシートを用いた面談の場面や日常生活上で変化が見られた場面の抽出	面談の回数を重ねていくと妄想的な言動は少なくなり、自分の希望や意見を伝えることが増えた。
3	出羽ら (2019)	長期措置入院患者の退院支援～ストレングスマッピングシートを用いたかかわりから見えてきた患者のレジリエンス～	60歳代男性	統合失調症	10年	病識の欠如	面接を通し退院を目標としたかかわり	院外外出が行え、退院後の生活について自ら話すようになった。退院後の服薬拒否があったが、介入後、内服継続の意思が見られた。
4	島田ら (2019)	野菜作りを通して活動意欲向上へのアプローチ～土や野菜に触れることでの変化～	60歳代男性	統合失調症	15年	無為自閉、 家族への妄想 あり	患者主体で野菜作りを行えるよう決定権は本人に委ねた	「満足感」「達成感」が得られ、自信が付き、患者の「自発性」「自己表現」「意欲向上」につながった。
5	田端ら (2019)	統合失調症患者へのストレングスマッピングシートの有用性	30歳代女性	統合失調症	3年	不安が強い、 希死念慮、 幻聴	ストレングスマッピングシートを活用し患者の希望や目標を達成できるように支援した	患者が決めたプランに従い外出を行えたことで次の外出への意欲の表出が見られた。
6	石川 (2018)	長期入院患者の意欲向上に向けたかかわり～ストレングスマッピングシートを活用し回復を支援した事例～	50歳代男性	統合失調症	2年	抑うつ	カルテ、ストレングスマッピングシート、日常生活チェック表から場面を抽出する	患者がもつ夢や希望共有することで、患者の自信と強みになり、清潔行動への意欲の向上につながった。
7	藤岡ら (2016)	ストレングスマッピングシートを取り入れた地域移行支援「母親と一緒に暮らしたい」思いに寄り添う	60歳代男性	身体表現性 障害・発達障 害	1年以上	ADLの低下 退行	ストレングスマッピングシートを使用し、本人の夢や思い中心のプランニングを行った	自己肯定感の向上につながり、患者のADLの回復と自立につながった。ストレングスに着目した関わりを続け1年後に退院となった。
8	山田ら (2016)	長期入院患者のストレングスに着目した関わり～退院支援に向けて～	30歳代男性	メチルフェニ デート使用に よる精神病性 障害	3年	語類が少なく、 会話の広が りがない	患者の言葉で退院に向けた目標を設定し、介入前後の情報と患者の経過記録表より、患者の言動の変化を検討した	ストレングスに着目し、承認の声かけなどの関わりは、服薬や片付けへのやる気などの行動の変化をもたらした。退院への意識が芽生えた。
9	大場ら (2015)	精神科病院におけるストレングスに焦点をあてた支援～患者の語りを活かして願いを叶えるためのかかわり～	50歳代男性	統合失調症	2年	積極的に思い を語ることはな い	カルテとインタビューに基づき患者の願いや強みに関する内容を抽出した	対話を重ねることで自分の気持ちを表出できるようになり、自分で判断する力を取り戻し、退院に向けて自立するための努力ができるようになった。
10	花田 (2008)	患者の自己決定を促し支持していくための援助～家族の患者理解と協働関係をめざして～	20歳代男性	統合失調症	3年	幻聴に左右さ れた自衛行 為・衝動行為	患者と「契約」を交わし、患者の自己決定の促進と支持、家族への援助等による患者・家族双方の変化を抽出する	患者の状態の改善と家族の患者受け入れが促進され退院となった。
11	西垣 (2007)	長期入院患者の自立への第一歩～ストレングスに焦点を当てたかかわりから見た自己決定能力の高まり～	50歳代女性	統合失調症	14年	幻聴・妄想・自 閉的	退院支援プログラムへの参加・生活支援センターで過ごすことを繰り返すことによる患者の自立への過程を見ていく	患者の興味を活かした関わりにより外出できるようになり、新たな希望の表出にもつながった。他者交流ができてきた。
12	坂上 (2006)	長期入院を経て退院を目指す患者への看護援助～現状認識を促す関わりから、退院への試みを支えて～	50歳代男性	統合失調症	20年以上	金銭管理がで きない	金銭管理から退院を目指した経過の振り返り	患者の力を信じ、患者の能力を活かす関わりによって、夢や希望の表出、退院への自己決定が促進され退院となった。

しく対話する (No.5)」など「信頼関係構築のための対話」や「(病院周辺を散歩して、看護師と一緒にいることに慣れ、安心できることを目的とし)生活支援センターに出かけようと誘う (No.11)」など「関係作りのための時間の共有」が行われていた。患者の反応は、「退院したい」「話が弾むようになった」など思いの表出や対話の促進につながっていた。

【患者理解に向けた対話を重視した関わり】では、「現在、感じていることや日々困っていること (No.3)」「これまでの経験等についての対話 (No.5)」など「患者の思いや経験の確認」や入院中・退院後の「患者のやりたいことの確認」が行われていた。患者は、「自分の自信がないから10年は退院できない」など自分なりの思いを答えていた。

【患者のストレングスに着目した関わり】では、「ニラを作っていたという発言から農業に興味があるのではないかと推測し、野菜作りを勧めた (No.4)」など患者の興味・関心、好物を活かした関わりが行われていた。患者の反応は、「やってみよう」と自主的な行動につながった場合もあればこれまでにしたことがないことに対して「嫌です」と拒否をする場合もあった。

【患者と共に行動する目標に向けた取り組み】では、「A

氏とともに振り返り、入院前の状態に戻りたいという目標を決める (No.9)」など「患者と話し合い目標の設定」を行い、「ショッピングセンターに行きたいと言われたため計画を立て実際に外出した (No.3)」など「患者の希望の実現に向けた関わり」や「取り組み後の思いの確認」などが行われていた。患者の反応は、「自立した生活ができるようになり、単独で棟外へ出られるようになった」、「外出をきっかけに看護師と会話する際の距離も近くなり、自分の意見を率直に伝えることが多くなった」など行動範囲の拡大、他者交流の促進や主体性につながっていた。中には、看護師の誘いや促しに対して、幻聴や陰性症状などの影響により拒否する場合もあった。

【セルフマネジメントを高める関わり】では、「整理はできていたがごみが落ちており捨てておくよう伝えた (No.8)」などの「できていない事への指導的な関わり」や「日々こままっていることに対して介入していき、療養生活の改善を図る (No.3)」などの「患者の思いを尊重したセルフケアへの関わり」が行われていた。また、患者の知りたい疾患や内服薬についてのパンフレットを用いた指導など「退院後を意識した関わり」が行われていた。「できていない事への指導的な関わり」での患者の反応は、「表

情に変化がない”“会話が續かない”“拒否”につながっていたが、《患者の思いを尊重したセルフケアへの関わり》では“笑顔での返答”や希望が述べられていた。

【困難に立ち向かう力を高める関わり】では、「代理での（靴の）購入を希望していたが、自分で行くよう話し合いを行った（No.4）」結果、約2年ぶりに単独外出ができたりと《患者の向き合う必要のあるセルフケアへの関わり》や「現実に直面する良い機会と考え、看護師やPSWからの電話対応にも兄は『払う意志はない』といったことをありのままに患者に伝える（No.12）」など《現実への直面化にむけた関わり》が行われ、“甘えてた”など患者の思いの表出や“苦悶の表情を浮かべ悩み、看護師に相談する”などの行動につながっていた。

【意欲を高める関わり】では、「できた時は労いの言葉をかけ（No.6）」「前回よりも長い時間過ごせたことを共に喜んだ（No.11）」りと《患者の言動への承認》や《できていることへの称賛の声かけ》を行い、「患者の社会性を認め、問題を乗り越える力があると信じている事を再三にわたって伝えた（No.12）」など《患者の想いを後押しする声かけ》が行われ、患者の“意欲の変化”や“主体的な行動変容”につながっていた。

【自己決定を意識した関わり】では、「野菜の苗の購入、土づくり、苗の植え付けなどは、患者主体となるように援助（No.4）」や目標に対する提案など《自己決定を促す関わり》や《主体性を意識した関わり》、《患者のペースを見守る関わり》が行われ、患者の意思の表出や自主的な行動につながっていた。

2) 社会復帰に向けた発言後の時期

この時期では、退院に向けて【患者主体の目標に向けた取り組み】が主に行われ、【自己理解を促す関わり】【立ち直る力を支える関わり】【希望と現状への折り合いをつける関わり】【患者の希望の達成に向けた連携】によって患者の思いを支えていた。

【患者主体の目標に向けた取り組み】では、《患者の目標・希望に沿った主体性を考慮した関わり》《患者の主体性を意識した取り組みの可視化》《指標を活用した思いや行動の共有》《患者の行動を見守る関わり》などが行われていた。《指標を活用した思いや行動の共有》では、ストレンクスアセスメントシートやカレンダーを活用した評価が行われて

いた。《患者の主体性を意識した取り組みの可視化》では、患者が目標への取り組みが退院へつながっていることをイメージできるようにパンフレットを作成していた。《患者の行動を見守る関わり》では、患者の希望を尊重すると「患者のストレス度が高まることに不安を感じたが、常に見守るというスタンスを保ち援助を続ける（No.10）」関わりを行っていた。これらの関わりは、退院に向けての“思いの表出”や“具体的にどうしたらいいのか考える”ことにつながっていた。

【自己理解を促す関わり】では、本人が認識していない「強み」や「私のしたいこと、夢」を伝える関わりが行われ、“入院することで諦めていた願い”や“したいこと”を語るきっかけにつながっていた。

【立ち直る力を支える関わり】では、「本人の退院意欲を大事にして、あきらめないでやって行こうと伝える（No.12）」「一時的に退行してもスタッフ全体で支持的にかかわりを継続した（No.7）」看護が行われ、“患者自ら日常生活能力を高めようと努力を始める”などの意欲や“ADLの改善”につながっていた。

【希望と現状への折り合いをつける関わり】では、「誇大的、軽躁的になり、—(省略)—社会復帰に向けての不安や希望が入り混じった状態であり当然と判断し、金儲けより、現実の生活に目を向けるように諭す（No.12）」ことで患者の目標に向けた取り組みを支えていた。患者は、“助言を受け入れ1週間くらいで落ち着き”、最終的に“退院”につながっていた。

【患者の希望の達成に向けた連携】では、家族や医療スタッフ間で患者の思いやストレンクスの共有・伝達が行われ、“ADLの改善”、“治療への意欲”や“患者と家族の安心”につながっていた。

表2. 時期におけるストレスに焦点をあてた看護

時期	カテゴリー	サブカテゴリー	構成文献
社会復帰に向けた発言がない時期	関係作りのための意図的な関わり	・信頼関係構築のための対話	文献:1・5・10
		・関係づくりのための時間の共有	文献:2・3・10・11
	患者理解に向けた対話を重視した関わり	・患者の思いや経験の確認	文献:3・5
		・患者のやりたいことの確認	文献:1・2・3・11
	患者のストレスに着目した関わり	・興味・関心を活かした関わり	文献:4:11
		・好む物を活かした関わり	文献:1
	患者と共に行う目標に向けた取り組み	・患者と話し合い目標の設定	文献:6・8・9
		・患者の希望をふまえた提案	文献:3
・患者の希望の実現に向けた関わり		文献:2・3	
・患者の思いを汲んだ関わり		文献:11	
セルフマネジメントを高める関わり	・取り組み後の思いの確認	文献:3・11	
	・治療に対する動機づけ	文献:11	
	・できていないことへの指導的な関わり	文献:4・8	
困難に立ち向かう力を高める関わり	・患者の思いを尊重したセルフケアへの関わり	文献:1・3・6	
	・退院後を意識した関わり	文献:1・3	
意欲を高める関わり	・患者の向き合う必要のあるセルフケアへの関わり	文献:1・2・3・4・5・8	
	・現実への直面化に向けた関わり	文献:12	
自己決定を意識した関わり	・患者の言動への承認	文献:6・8・11	
	・できていることへの賞賛の声かけ	文献:8	
	・患者の想いを後押しする声かけ	文献:11・12	
社会復帰に向けた発言後の時期	患者主体の目標に向けた取り組み	・自己決定を促す関わり	文献:4・11
		・主体性を意識した関わり	文献:5・11
		・患者のペースを見守る関わり	文献:4
		・患者の目標・希望に沿った主体性を考慮した関わり	文献:5・7・10・12
		・患者の主体性を意識した取り組みの可視化	文献:9
		・指標を活用した思いや行動の共有	文献:9・10
	自己理解を促す関わり	・治療に対する患者の思いの把握	文献:3・7・10
		・患者の行動を見守る関わり	文献:10
		・取り組み後の思いの確認	文献:5
		・患者の行動への承認	文献:7・10
立ち直る力を支える関わり	・自己理解を促す関わり	文献:5・9	
	・立ち直る力を支える関わり	文献:7・12	
	・希望と現状への折り合いをつける関わり	文献:10・12	
	・患者の希望の達成に向けた連携	文献:5・7・10	

V. 考察

患者の社会復帰に向けた発言前後でストレスに着目した看護の特徴を結果に示した。関わり方に大きな特徴の差はなく、統一された基本的な姿勢が確認された。看護師は、患者との対話を重視しながら患者の思いや希望に着目していた。また、患者が現実に向き合えるように関わり、患者の主体性を育みながら患者の言動を支持していた。ここでは、長期入院患者の社会復帰に向けたストレスに着目した看護の特徴をリカバリーの視点も含め考察していく。

1. 信頼関係の構築と対話を重視した関わり

社会復帰に向けた発言がない時期では、患者との関係づくりや患者理解のための対話がまず行われていた。また、双方の時期で患者の目標に向けた取り組みが看護師と共に行われていた。長期入院患者は、これまでの長い入院生活の中で様々な挫折や諦めの体験とともに、孤独への脅威、実存性が脅かされることへの不安、自己受容性の低下に伴う苦悩⁷⁾を感じやすい。さらに、施設症や疾患の影響などによって対人関係が築きにくいことから自己主張や自己決定が思うようにできない傾向にあるため【関係づくりのための意図的な関わり】や【患者理解に向けた対話を重視した関わり】によって、患者が自分の希望や思いを言いやすいよう配慮した関わりが行わ

れていると考える。また、池淵⁸⁾は、精神症状がやや重く、不安が高度で、退院拒絶などの特徴がある人は、最後まで地域移行が困難であったと述べ、治療者との1対1での精神療法的かかわりなど時間をかけて関係性を構築していく援助の必要性を述べている。このことから患者の思いや希望を引き出した後に、患者のリハビリに向けて「自分が回復するイメージや、自分が具体的にどのようになりたいかというビジョン（リハビリの希望の段階）」⁹⁾を患者がもてるように患者と共に目標に向けた取り組みを行いながら継続した患者との関係性の構築や対話を行うことは、退院に向けて重要であるといえる。

2. 現実に向き合う力を高める関わり

社会復帰に向けた発言がない時期では、【セルフマネージメントを高める関わり】【困難に立ち向かう力を高める関わり】、社会復帰に向けた発言後の時期では、【希望と現状への折り合いをつける関わり】【自己理解を促す関わり】で現実を認識できるよう関わるとともに、現実に向き合える力を高めることができるよう支援していた。

長期入院患者は、これまでの病気や症状との付き合いや社会における失敗した体験、家族関係や社会復帰の現実の厳しさに自分自身ではどうしようもできない現実に直面せざるを得ないことから、自己主張を抑えることで自己の安定を保ち、現実状況から目を背けやすい。ストレスを避けることは成長を促す機会に直面しないようにすることと同じでありリハビリ効果を減らす¹⁰⁾ため、患者が自らのリハビリについて考えていくためには、様々なストレス状態を経験しながらそこから回復する力（レジリエンス）を高めることが重要である。本研究では、現実への認識や現実に向き合える力を高めることができるよう関わる中で患者から思うような反応が得られない場合や怒りや拒否などが生じる場合があった。その際には、【意欲を高める関わり】【立ち直る力を支える関わり】【患者の希望の達成に向けた連携】を行う中で患者の力を信じていることを伝え、励まし、賞賛することで状態の悪化を最小限にし、リハビリへの意欲の維持や促進を行っていた。また、スタッフ全体で支持的関わりを継続することで患者の状態の改善につながっていた。そのため、看護師一人ひとりがあきらめずに患者の可能性を信じて患者の意思の表出を促し、選択の機会を提供しながらスタッフ全員で患者の意思決定を支持すること

で患者のリハビリの促進が期待される。したがって、看護師は、患者が希望をもち続け、リハビリに伴うストレスやチャレンジ、失敗や成功を支持していくことで患者が現実に向き合い、乗り越えていけるように支援することが必要である。

3. 主体性を育む関わり

社会復帰に向けた発言がない時期では、【患者理解に向けた対話を重視した関わり】【患者のストレスに着目した関わり】【患者と共に行う目標に向けた取り組み】【セルフマネージメントを高める関わり】【意欲を高める関わり】【自己決定を意識した関わり】が行われ、社会復帰に向けた発言後の時期では、【患者主体の目標に向けた取り組み】【自己理解を促す関わり】によって主体性を育んでいた。長期入院患者は現実状況から目を背けやすく¹¹⁾、自分の人生を主導するという認識が少ない¹²⁾ことが分かっている。そのため、一歩を踏み出す時に周囲の意見によって進む状況があり、一歩を踏み出した後に何らかの要因でつまづいたとき、症状の悪化や再入院につながる¹³⁾ことから患者の思いや自己決定を待ち、主体性を育むとともにレジリエンスを高めることは重要である。本研究では、【自己決定を意識した関わり】【患者主体の目標に向けた取り組み】の中で患者の言動を見守る関わりが行われている。見守ることで退院に向けての“思いの表出”や“具体的にどうしたらいいのか考える”ことにつながっており主体性が育まれていた。しかし、看護師は対象者の意欲を喚起したい思いや希望を叶えたいという思いが強いと、問題解決を急いでしまう傾向¹⁴⁾にあることから、患者の十分な思いの表出や意思決定にいたらないこともあると推察される。また、リハビリは、いつも順調に右肩上がりではなく、よいときと悪いときを繰り返す¹⁵⁾ため焦らず見守ることも重要である。本研究では、患者のストレス度が高まった場合や職員の助言に対して拒絶的となった場合に患者の行動やペースを見守る関わりが行われていた。精神疾患患者は、対人関係において困難を感じる方も多い。また、長期入院は限られた環境の中での対人関係しかないため困難が生じた場合は患者のレジリエンスを高める重要な機会となる。そのため、患者と看護師は、一進一退しながらも、持ちこたえることができる「関係性」が必要である¹⁶⁾。植本¹⁷⁾は、患者からの反応を根気強く待つことは援助関係を形成していくうえで看護師にとって重要な

スキルであり、患者を理解しようとすることは、患者との関係性の中に身を置くことや根気強く待つこと、患者自身の力にゆだねることなどを可能にするとして述べている。このことから、患者の状態が変化した際には、その時の患者の思いや感情を大切に、患者理解に努めることが重要である。そうすることで長期入院による施設症や長期化している精神症状に伴い様々なことをあきらめ、苦しんでいる患者の思いの表出や自己決定、レジリエンスを高める経験を支援するための意図的な関わりが可能となり、患者の主体性や新たな希望を育みリカバリーの促進につながると思われる。

VI. 結論

長期入院患者のストレンクスに焦点をあてた看護は、社会復帰に向けた発言前後の時期で大きな特徴の差はなく、統一された基本的な姿勢が確認された。看護師は、患者との対話を重視しながら患者の思いや希望に着目していた。そして、患者が現実に向き合えるように関わり、患者の主体性を育みながら患者の言動を支持する看護が行われていた。

長期入院患者の社会復帰や状態の改善には、継続した患者との関係性の構築や対話を行い、患者の思いや自己決定を見守りながら主体性を育む意図的な関わりが重要である。また、看護師は患者が現実に向き合い、乗り越えていけるように支援することで患者のリカバリーの促進につながることを示唆された。

引用文献

- 1) 厚生労働省：第1回精神保健福祉士の養成の在り方等に関する検討会。2020
<https://www.mhlw.go.jp/content/12200000/000462293.pdf> (閲覧日 2021/8/30)
- 2) 萱間真美：当事者に聴く姿勢を伝えるーストレンクス・マッピングシートを活用した演習ー。看護教育。59 (4)：280-284, 2018
- 3) 福井貞亮：精神障害者地域生活支援の国際比較ーアメリカ合衆国ー。
<http://www.ipss.go.jp/syoushika/bunken/data/pdf/19785505.pdf>

(閲覧日 2021/8/26)

- 4) チャールズ・A・ラップ&リチャード・J・ゴスチャ／田中英樹 (訳)：ストレンクスモデル；リカバリー志向の精神保健福祉サービス。第3版。pp. 86-87, 金剛出版。東京, 2017
- 5) 前掲書 4)：p.43
- 6) 萱間真美：リカバリー・退院支援・地域連携のためのストレンクスモデル実践活用術。p.2, 医学書院。東京, 2016
- 7) 藤野成美, 脇崎裕子, 岡村仁：精神科における長期入院患者の苦悩。日本看護研究学会誌。30 (2)：87-95, 2007
- 8) 池淵恵美, 佐藤さやか, 安西信雄：統合失調症の退院支援を阻む要因について。精神神経学雑誌。110 (11)：1007-1022, 2008
- 9) 前掲書 6)：p.12
- 10) マーク・レーガン／前田ケイ (訳)：リカバリーへの道；ビレッジから学ぶ精神の病から立ち直ることを支援する。p.61, 金剛出版。東京, 2005
- 11) 上野恭子, 栗原加代, 羽山由美子：長期入院精神分裂病患者の生活行動の特徴；患者の言動に焦点をあてた質的研究。精神保健看護学会誌。10 (1)：102-109, 2001
- 12) 黒髪恵：精神疾患を持つ人の「リカバリー」に関する研究；地域で生活する人のためのプログラムの作成。p.8, 2015
file:///C:/Users/ando_a/Downloads/k1462_all.pdf
(閲覧日 2021/8/25)
- 13) 前掲書 12)
- 14) 田中昌恵, 土田和重, 小野悟, 石川かおり：入院継続を希望する長期入院患者の退院に向けた意欲に働きかける看護の検討；ストレンクスモデルを活用した取り組み。第50回日本看護学会論文集 精神看護。106-109, 2020
- 15) 前掲書 6)：p.9
- 16) 前掲書 6)：p.30
- 17) 榎本香, 野嶋佐由美, 田井雅子：心理的距離のもち方における看護者の姿勢；統合失調症をもつ患者との関わりから。高知女子大学看護学会誌。38 (2)：99-107, 2013

採用文献

1. 山口由紀子：統合失調症慢性期におけるその人らしさを支える援助；患者のストレンクスを最大限活かすかわり。日本精神科看護学術集会誌。62 (2)：193-197, 2019

2. 笠原猛, 小野目伴美: 重度かつ慢性患者と看護師の関係性の変化について; ストレングスモデルに着目した継続的なかかわりを通して. 日本精神科看護学会誌. 62 (1): 344-345, 2019
3. 出羽達, 川田英志, 馬明康宏: 長期措置入院患者の退院支援; ストレングスモデルを用いたかかわりから見てきた患者のレジリエンス. 日本精神科看護学会誌. 62 (1): 346-347, 2019
4. 島田洋子, 深津昌子: 野菜作りを通して活動意欲向上へのアプローチ; 土や野菜に触れることでの変化. 日本精神科看護学会誌. 62 (1): 360-361, 2019
5. 田端一成, 菅谷智一, 中谷章子, 森千鶴: 統合失調症者へのストレングスモデルの活用有用性. 看護教育研究学会誌. 11 (2): 37-44, 2019
6. 石川香: 長期入院患者の意欲向上に向けたかかわり; ストレングスモデルを活用し回復を支援した事例. 日本精神科看護学会誌. 61 (1): 326-327, 2018
7. 藤岡順子, 榎基宏: ストレングス視点を取り入れた地域移行支援; 「母親と一緒に暮らしたい」思いに寄り添う. 日本精神科看護学会誌. 59 (2): 336-340, 2016
8. 山田成功, 小谷直江, 澤田典子, 高間さとみ: 長期入院患者のストレングスに着目した関わり; 退院支援に向けて. 日本看護学会論文集; 精神看護. 46: 216-219, 2016
9. 大場なつき, 石田正人: 精神科病院におけるストレングスに焦点をあてた支援; 患者の語りを活かして願いを叶えるためのかかわり. 日本精神科看護学会誌. 58 (3): 129-133, 2015
10. 花田政之: 患者の自己決定を促し支持していくための援助; 家族の患者理解と協働関係をめざして. 日本精神科看護学会誌. 51 (3): 107-111, 2008
11. 西垣里志: 長期入院患者の自立への第一歩; ストレングスに焦点を当てたかかわりがもたらした自己決定能力の高まり. 日本精神科看護学会誌. 50 (2): 534-538, 2007
12. 坂上章: 長期入院を経て退院を目指す患者への看護援助; 現状認識を促す関わりから、退院への試みを支えて. 日本精神科看護学会誌. 49 (2): 269-273, 2006

Literature Review Regarding the Characteristics of Nursing Focusing on the Strengths of Long-Stay Psychiatric Patients

Ai Ando *, Yuki Goto **, Yukiko Maeda *

<Abstract>

This study presents a literature review intended to identify the characteristics of nursing, focusing on the strengths of psychiatric patients who are hospitalized on a long-term basis. The paper examines 12 case studies that describe in detail how nursing was provided and how the patients were changed as a result. These case studies were found on the website of the Japan Medical Abstracts Society after a search that covered all years using the keywords *sutorengusu* (strengths), *seishin* (spirit), and *kango* (nursing). For analysis, nursing contents were extracted, labeled, and categorized. The characteristics of nursing that focused on the strengths of long-stay patients were such that nurses emphasized dialogue with patients and focused on the patients' thoughts and hopes to help them face reality. In addition, nursing was provided to support the patients' words and actions while fostering their independence. In order to help long-stay patients return to society and improve their conditions, it is necessary to continuously build relationships with the patients, have a dialogue with them, and foster their independence by observing how they think and make decisions on their own. It was also suggested that nurses can promote patients' recovery by helping them face and overcome reality.

Keywords: long-stay patients, strengths, nursing, literature review

* Department of Nursing, Faculty of Health and Welfare, Seinan Jo Gakuin University

** Formerly Department of Nursing, Faculty of Health and Welfare, Seinan Jo Gakuin University

